

文芸部から医学の道へ



「高校の成績と社会での活躍は必ずしも比例しない」と話す加藤進昌さん

東大医学部に進学する。大学でも物理や数学は、よくわからなかったという。

「今は成績がいいと医学部へとといった風潮があるが、当時は日本が高度成長期で、私より成績のいい友だちは工学部に行った。医学部に行くのはちょっと変わり者という雰囲気だった」と振り返る。

東大病院の病院長も務め、長年東大で発達障がいを研究した。退官後、大人の発達障がいを見学する医者がいないという問題を解決しようと、専門外来をつくった。

「高校では勉強もしたが、自分が好きな読書にのめり込めたことが幸せだった。個人の自由を尊重する学校だった」

高校の時は恥ずかしがり屋で、授業で先生にあってられただけで真っ赤になっていたという、精神

科医の高橋龍太郎さん (70、65年卒)。

高校の時は名古屋を出たくて仕方がなかった。引っ込み思案の青年があこがれたのは演劇の世界。文芸部に所属し、劇場に足しげく通った。当時は東京よりも映画の封切りが遅く、「東京に出たい」と父親に訴えた。

外科医の父親の答えは「東京大学かそのほかの大学の医学部に合格したら、東京に行ってもいい」。慶応大学医学部に進学する。

当時は学生が社会に対する異議を申し立てたり、不満をぶつけたりする学生運動が盛んだった時代。すっかり引き込まれた。それまで内に向けたかのように、討論で次々に相手を打ち負かした。

授業には出席せず、単位も取れず結局、大学をやめる。その後、東邦大学医学部に入学。体を診ることは向いていない気がして、精神科医の道を目指した。

高校のときに演劇に熱中したことが、今の診療にも役立っているという。「何かに打ち込むことが自分の栄養となり、底の深い診察につながっている」。統合失調症やアルコール依存症の患者と、笑い合える時間を大切にしている。



日本の現代美術約28000点を所蔵し、展覧会も開催している高橋龍太郎さん